

稱する所以である。つゞいて弘法大師が密教そのものを傳へたから、弘法大師の傳へた密教を東密と稱するに對し、傳教大師の傳へた密教を台密といふ。

本書は天台宗の清水谷恭順師が台密の歴史と事教の二相とを簡明に提示されたものである。第一編「教史」の篇に於て密教の歴史をまづ印度、支那の二國に互つて叙述し、我が國に於ける台密を詳に説いて、明治に及んである。第二編は「教綱」三題し、教相と事相との主要な論題十五をあげて説いてある。菊版二五二頁の書であるから、全體にわたつて細密な説明を求めがたいけれども、現代文で平易に大綱を掲げ、特に専門語や地名なきには上欄に註解を施してあるから、初學入門の士には便利である。況や現代文正平明に台密を説いた本が稀少なる今日とじて、學益をも少なからず與へるであらうと信ぜられる。(東京帝國大學正門前、山喜房發刊、定價貳圓參拾錢)

大思想家 (カント、フイヒテ、ヘーゲル、シエリング) 大橋勉譯

本譯書はエルンスト・ツォン・アステルの編纂した、「大思想家」(Grosse Denker)の中から、一部分を譯したものである。原書はギリシヤ以來の大哲學者又は學派について諸學者が分擔執筆したものであつて、各篇それ々々

が一つづつ、獨立した研究論文であると共に、全部を通じて一部の西洋哲學史となる組織である。執筆者がそれ々々特に深く研究した哲學者又は學派について書いてゐるから、一人で西洋哲學史を書くよりは、確にその部分にも深い研究の成果を提供してゐる。しかも、部分的特殊の研究の論文でない、哲學者又は學派について一般的に、即ち各學者の學說と人格とを包括的に述べてある。即ち一種新しい試みの哲學史として學界に歡迎されるものであるといふことが出来るであらう。本譯書はその中からカント(メンツェル執筆)、フイヒテ(メデクス執筆)、ヘーゲル(ファルケンハイム執筆)、シエリング(ブラウン執筆)の四篇だけを抜萃して譯出したものである。尙原著の他の部分は他の譯者によつて譯出されるさうである。(岩波書店發刊、貳圓參拾錢)